

#1234

※2024年7月19日現在



1	みさき小学校グラウンド	50世帯	11	ファミイ駐車場	16世帯
2	三崎中学校グラウンド※	60世帯	12	シンザン跡地	142世帯
3	多目的広場	117世帯	13	農村ふれあい広場横・河原田公民館奥	39世帯
4	見附ドーム駐車場	43世帯	14	住吉公民館道路向い民地	11世帯
5	松波港町用地	22世帯	15	門前グラウンドゴルフ場	279世帯
6	のとスポーツピアツツア※	123世帯	16	ふれあい工房阿岸グラウンド	34世帯
7	健康ふれあい広場	39世帯	17	ななかクリーンセンター	28世帯
8	輪島港	67世帯	18	七尾市上下水道課所有地	25世帯
9	農村ふれあい広場	30世帯	19	とぎ第2団地	65世帯
10	河原田小学校グラウンド※	44世帯			

※大和ハウス工業担当

特集 令和6年能登半島地震

受け継ぐ使命、伝えたい想い

2024年1月1日16時10分に石川県の能登半島で発生した大地震。輪島市や珠洲市など多くの地域で震度7や6強の揺れを観測し、石川県の住家被害は8,053棟が全壊、16,746棟が半壊したほか、水道や道路も甚大な被害を受けました。当社は被災した地域の方々の暮らしを1日でも早く取り戻すため、発災直後に各部門から専任された若手メンバーを主軸にした「能登震災プロジェクト室」を発足。現地での情報収集に加え、必要な資材の調達と搬出に向けて準備を進めたことで、応急仮設住宅の建設を迅速にスタートすることができました。今回の特集では震災支援に携わったメンバーや協力会社様、関係者が支援を通して考えたこと、そしてこれから起こりうる大規模災害に向けて得られた学びを紹介します。

出典：内閣府 防災情報のページ「令和6年能登半島地震による被害状況等について（令和6年6月25日14:00現在）」

- P05 初動
- P07 震災プロジェクト
- P09 設計
- P11 DX
- P13 工事
- P16 デポ・工場/購買
- P17 金沢支店
- P19 対談 金沢支店長×能登震災プロジェクト室長
- P20 社長メッセージ





珠州市みさき小学校にはDX推進山本さん、角さん、名古屋設計西山さん、大阪設計福森さんが向かった



輪島市農村ふれあい広場には設計推進久保居さん、澤田さん、中部設備倉本さん、DX推進友国さんが向かった

8日(月)

現地調査をもとにプレハブ建築協会と打合せ、数ヶ所の候補地で建設が可能と判断、県との協議・交渉を開始

9日(火)～

調査結果、配置図を県に提出し建設地が確定

12日(金)

着工

被災地に隣接する拠点の確保
ムービングオフィスの招集を指示



ムービングオフィスを活用して、現地と事務所がタイムリーに連携

体制構築

5日(金)

全国から設計、DX推進を皮切りに、工事、営業、管理のメンバーが続々と集結
発災1週間後の8日を着工目標として決定

6日(土)

現地調査に向け、道路やインフラの寸断を想定し、キャンプ用品を購入
トイレが使えないことも想定し、簡易トイレやバケツも用意



第一陣稼働

7日(日)

早朝5時、真っ暗で極寒の中、防災用品・キャンプグッズ等を詰め込み、応急仮設住宅建設候補地である珠州市みさき小学校、輪島市農村ふれあい広場の現地調査へ出発
5～6時間かけて現地入りし、建設候補地の現地調査、測量を開始

発災

1日(月)

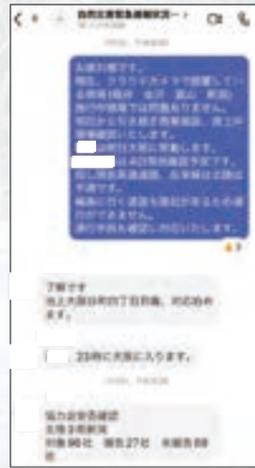
社長はじめ、役員間で連絡を取り合い翌日以降の動きを調整

2日(火)

技術系の役員が集結し初動対応を協議

3日(水)

金沢支店長が、事務所の片付けや営業車の燃料補給等、初動対応の準備・フォロー



1月1日午後8時のチャット画面。協力会社様の安否確認報告や、初期対応を協議

環境整備

4日(木)

石川県と初回面談
役員より各部門の責任者へ初動を指示、工事部門のエリア統括部長7名に体制構築を指示
旅行会社を通じて宿泊施設の確保
建設機械レンタル会社に発電機や給水機を手配、工事機材を調達

発災から着工までの日数

#12

初動

異例の短期間で着工

今回の地震は、M7.6の規模を記録し、北海道から九州にかけて震度6強～1を観測しました。

当社でも、ただちに従業員の安否確認が始まり、会長、社長、役員が連絡を取り合って対応を協議。そして、翌日の2日には本社に集結して各地への連絡や指示を発信しました。被災された方々が安心できる暮らしを1日でも早く取り戻せるよう、応急仮設住宅の最短着工可能日を発災1週間後の8日と定め、速やかに準備を進めました。初動対応に駆けつけたメンバーが迅速に現地調査を行い、デポ・工場が部材の出荷体制を整えたことで、県からの要請を受けてすぐの1月12日に着工しました。



1月12日に60戸の着工を報じた2024年1月6日付北國新聞朝刊1面の紙面。

プレハブ建築協会

いつ起きるか分からない災害のために自治体との関係強化は必須



一般社団法人プレハブ建築協会へ出向(左から)

さん

さん

さん

さん

※応急仮設住宅建設までの流れはDASH・netをご覧ください。

1月4日に石川県庁を訪問し、応急仮設住宅建設に向けた協議を開始しました。私(一と)さんは、普段からプレハブ建築協会の仕事にも携わっていますが、さんとさんは発災後に出向が決定し協会の仕事に従事してくれています。われわれは、1月9日に設置された現地建設本部に他の会員会社と共に常駐し、石川県との応急仮設住宅の仕様の検討、建設候補地の調査、石川県からの建設要請に基づく会員会社からの建設を行いました。発災から1ヶ月間は石川県や会員会社、関係機関との協議・調整などで大変でしたが、過去の経験と多くの方の協力で軌道に乗せることができました。災害復興に携わる度に、いつ起きるか分からない災害時の応急仮設住宅建設に備えて都道府県との意見交換や事前準備・模擬訓練、各種講演への協力など平常時の備えがとても大切だと感じています。

石川県

自治体の切実な要望に真摯に対応してくれたパートナー

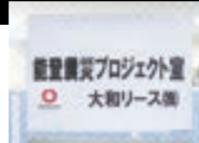


様

石川県では各市町の要望に基づき、被災された方々の応急仮設住宅の建設を8月中に完了させることを目指しています。応急仮設住宅の原資は税金であるため、断熱性など必要な性能を備えながら、一方でコストの低減を図ることも欠かせません。そんな中、今回は多くの高齢者が被災されているため、国と協議して予算を確保しスロープなど全戸のバリアフリー化を実現できました。被災した各市町からは「一日でも早く住民に住宅を提供したい」「限られたコストと敷地内でできるだけ住戸数を増やしてほしい」など切実な要望が多く寄せられました。山間部が多く、応急仮設住宅を建てるための適した土地が少ない中で、各メーカーはさまざまな工夫を凝らし、迅速に工事を進めてくださいました。時に厳しい交渉となる中でも、大和リースさんは、できること、できないことを根拠を持って明確に示しながら、私たちのパートナーとして最後まで誠実に対応してくださった姿勢が印象に残っています。

能登震災プロジェクト室

応急仮設住宅建設に特化した臨時プロジェクト
(コメント内ではPJと表記しています)



士気が高いチームで 数々の難題を乗り越えました

能登震災プロジェクト室の業務は主に、プレハブ建築協会（以下、プレ協）から、応急仮設住宅の設計や建設の要請を受け、建設候補地の測量、配置図の設計、配置計画の立案やコストなどを算出し、それらを基に県との協議や交渉、工事の実施・管理を行うものです。候補地ごとに計画された戸数を引き渡すまでの責任を果たすことが、チーム共通の目標であり使命です。震災対応は不確実性が高いため、予想もしない多くの問題が毎日発生しました。それでもチームの士気は発足当初から高く、部門の垣根を越えて意見を交わしました。ともに解決策を出し合える関係を築けたことは、貴重な経験と財産になりました。



さん

営業・管理メンバー



さん

管理責任者として赴任した中で協力会社様の宿泊先確保に苦勞しました。工程に大きく影響するため、一施設を丸ごと借り上げたり、複数の旅行会社を通して宿泊枠を長期取得しました。全国の管理責任者の方々からのアドバイスや熊本地震を経験された方々からの温かいメッセージに感謝しています。



さん

市町村との協議や応急仮設住宅の引き渡し、入居者対応を担当。関係各所と一つの方向を向き全力で取り組んだこと、入居者の方と最も近い距離で仕事をさせていただいたことで、価値観や姿勢が大きく変わりました。今後も能登の復興のために何ができるかを考え、行動していきたいです。



さん

石川県との交渉や市町村との打合せ、現場の調整を担当。県との金額交渉では根拠の提示に大変苦勞しましたが、各部署のメンバーと知恵を出し合い、県と信頼関係を築き契約合意できました。普段関わりのないPJメンバーとのやり取りを通じて、自身の成長に繋がる経験ができたと感じています。



さん

経理業務と宿泊手配を担当。現場近くの宿泊先はインフラが止まり、金沢市内は他の復興会社や旅行客が多い中、旅行会社や宿泊施設と交渉し、宿泊先確保に努めました。応急仮設住宅に入居された方を見たととき、自分たちの仕事に役に立っていると感じ、より頑張ろうと思えました。



さん

工事管理としてPJに配属されましたが、実際は人事・総務・設計管理など経験したことのない業務も多く苦勞しました。多くの方にご指導いただきながら取り組むことができました。今後も積極的に新しい業務を経験し学び、どの分野でも活躍できる存在になれるよう行動したいと思います。

九州・沖縄エリア

9名
工事3名 / 設計4名
生産1名 / 営業1名

応援に駆けつけた118名

※派遣・異動など人事発令が出た人の数
※事業所移動のない人も含む
※2024年7月1日現在

北海道・東北エリア

8名
工事4名 / 設計4名

北陸・信越エリア

6名
工事2名 / 設計1名
営業2名 / 管理1名

関東エリア

25名
工事9名 / 設計6名
生産3名 / 営業6名
管理1名

中部エリア

15名
工事7名 / 設計4名
営業1名 / 管理3名

近畿エリア

45名
工事4名 / 設計22名
生産9名 / 営業1名
管理9名

中国・四国エリア

10名
工事5名 / 設計4名
生産1名

#2397

大和リースの従業員数

※2024年5月31日現在

震災プロジェクト

能登震災プロジェクト 全社一体での取り組み

応急仮設住宅の建設に特化した能登震災プロジェクトは、将来の大規模災害に備えるために「若いチームで」という方針のもと、若手を中心とする全国から集められたメンバーで結成。一方、派遣されたメンバーが在籍する全国の事業所では残ったメンバーが業務を引き継ぎ、通常どおりの活動がスタートしました。現地での活動に参画したプロジェクトメンバーと、派遣された方々の業務を引き受けて事業所運営に当たったメンバー、当社の従業員2,397名が一体となって挑んだ全社的な活動となりました。

原動力は、 突き動かされる使命感

震災直後からの一致団結と迅速な行動は、当社の従業員が共有する使命感によるものだと考えています。身近な上司・先輩の姿勢や日頃のコミュニケーションを通じて受け継がれている災害支援に対する使命感が、緊急時に生かされていることをあらためて実感しました。災害対応の経験がないメンバーを選出したのも非常時での経験を積み、その姿を次の世代に見てもらいたかったから。まさに当社の企業理念である「事業を通じて人を育てる」の実践といえます。

社内で最初の現場の着工目標日を、震災1週間後の1月8日に設定。一丸となって準備し、県から依頼を受けて12日に着工しました。スピードに加えて重視したのは、労働環境と働き方の改善。交通インフラの被害も大きく、現場まで5時間から6時間かかる中、移動中の事故を防ぐためにバスなどをチャーターするように、という社長の指示もあり、現在まで通勤災害はありません。また、当初の想定5倍もの応急仮設住宅の建設を担当することになったため、47都道府県の工事責任者をシフト制で現地に派遣。休みの確保だけでなく技術を若手に伝える機会にもなり、工事担当者にとって何より重要な安全、品質、工期を守ることができました。

災害対応に力を尽くしたのは現地に派遣されたプロジェクトメンバーだけではありません。事業所に残り、人員減の中、平時と変わらない業務を全うした従業員たちもまた並ならぬ苦勞があったはず。いわば大和リースの全員が総力を挙げて復興（災害）支援に挑んだといえます。震災から半年たった今、皆さんを労いたいという気持ちでいっぱいです。



さん



2



3



4



5

- 1 スマートグラスを活用した現地測量の様子
- 2 スロープを設置した応急仮設住宅（珠洲市みさき小学校）
- 3 コンクリートプラントの壊滅を受けH鋼基礎で対応（志賀町とき第2団地）
- 4 バリアフリー対応の衛生設備機器
- 5 現地からタイムリーに届く測量データをともにPJのメンバーが配置図を作成

設計メンバー



さん

各種図面作成・現地調査・各種検査を担当。ToDoリストを作成し、やるべきことを確認しながら目の前の仕事に注力しました。今回の経験を通して、一人でできる仕事はなく、また人は一人では生きられないことを改めて実感しました。PJで得られた人とのつながりを大事にしていきたいです。



さん

図面作成に加え、現地調査、復旧協議、検査を担当。通常物件と比べ着工までの期間が短かったものの、タスクとスケジュールの洗い出しと、周囲との密なコミュニケーションで、スムーズに遂行することができました。この経験を今後の業務に活かしていきたいです。



さん

他部署との調整事が多々ありましたが、着手後の変更事項などを細かく共有することができました。また配置図作成では解体後の現状復旧を含んだ計画を立てる必要があるなどPJでの仕事を通じて、先を見越して物件の検討を行う視点が養われたと思います。



さん

現地調査・図面作成から石川県による図面承認までのスケジュールが短く大変でしたが、設計内で作業分担し、相談・協力しながら乗り越えました。これまで他店の方と話す機会があまりなかったので、新たな気付きがありました。今後も何かあれば相談したいです。



さん

設備設計業務を担当。震災当初は、施工会社がなかなか見つからず、県外の協力会社様に声をかけて応援に来ていただきました。厳しい工程の中、計画の流れやインフラ復旧を考慮した設計に苦労しました。多忙でしたが、それ以上のやりがいがあったと感じています。



さん

意匠設計チームには震災支援経験者がおらず、年齢の若いチーム構成でしたが、本社にサポートしていただき大和リースとしての責任感と使命感を持ってやりきることができました。新たな経験や学びの機会があるので参加して良かったと感じています。皆さん、ぜひとも挑戦してみてください！



さん

着工前の概算見積と、契約前の精算見積の作成を担当。根拠を示す資料作成など大変でしたが、PJの業務は特殊なようで実は通常業務の延長上にあるため、常日頃から考えて業務を行うことの重要性を再認識しました。地区や課の枠を超えた社内のつながりも大きな財産です。

取材こぼれ話

使用できなかったデジタルツール!?

現地調査の第一陣が出発した1月7日は、みぞれ混じりの極寒。分厚い雲の影響で衛星からの信号を受信できず、GNSS測量は中止し、従来通りの手作業による測量が行われたそうです。



要請1件あたりの業務完了までの日数

#7

設計

現場から現場へ、週単位で対応

設計の体制は意匠設計5名、設備設計4名の9名で、1月6日から金沢支店で活動をスタートしました。初期の業務はプレ協から依頼される応急仮設住宅の建設候補地の調査をすること。発災から3ヶ月間は調査と図面作成の繰り返しで、体力的にも精神的にも疲弊していきましました。そんな中で全国から週替わりで応援に来てくれた設計の責任者やチームリーダーの方々のサポートには本当に感謝しています。今回の調査から着工までの設計フローでは、BIM※1をはじめとするデジタル技術を積極的に活用したことで、1件あたり7日という短期間での業務完了を実現することができました。例えば建設候補地に現地調査に行ったメンバーが、測量したデータをその場で事務所の待機チームに送ることで、調査当日中に配置図や報告書を作成することができました。専門知識がなくても高い精度で測量可能なGNSS測量※2を採用したことも有効でした。また、今回の地震では周辺のコンクリートプラントが被災したこともあり、基礎はH型鋼お



さん

- ※1: BIMとは、Building Information Modeling (ビルディング インフォメーション モデリング) の略でコンピューター上に作成した3次元の建物のデジタルモデルに、コストや仕上げ、管理情報などの属性データを追加した建築物のデータベースを、建築の設計、施工から維持管理までのあらゆる工程で情報活用を行うシステムのこと
- ※2: GNSS測量とは、Global Navigation Satellite System (全球測位衛星システム) を使用した測量方法で、複数の測位衛星から信号を受信できるため、GPSよりも高精度の測位が可能
- ※3: PCa (プレキャスト鉄筋コンクリート) 盤とは、工場などであらかじめ製造されたコンクリート製の板のこと
- ※4: 乾式基礎工法とは、コンクリートなど、現場で水を必要とする材料を使わずに建築物を施工する方法

よびPCa盤※3を活用した乾式基礎工法※4を採用しました。そのほかにも入手困難な資材が多く計画段階から大変な苦労を強いられるなど、数々の想定外の課題に直面しましたが、メンバー全員の密な連携で乗り越えることができました。被害に遭われた方々に少しでも早く安全な住まいを提供できたことは、大きな喜びと経験につながりました。

DX の取り組み

※DXとは、Digital Transformation (デジタルトランスフォーメーション) の略でデジタル技術の活用しビジネスモデルの革新を実現すること

熊本大学



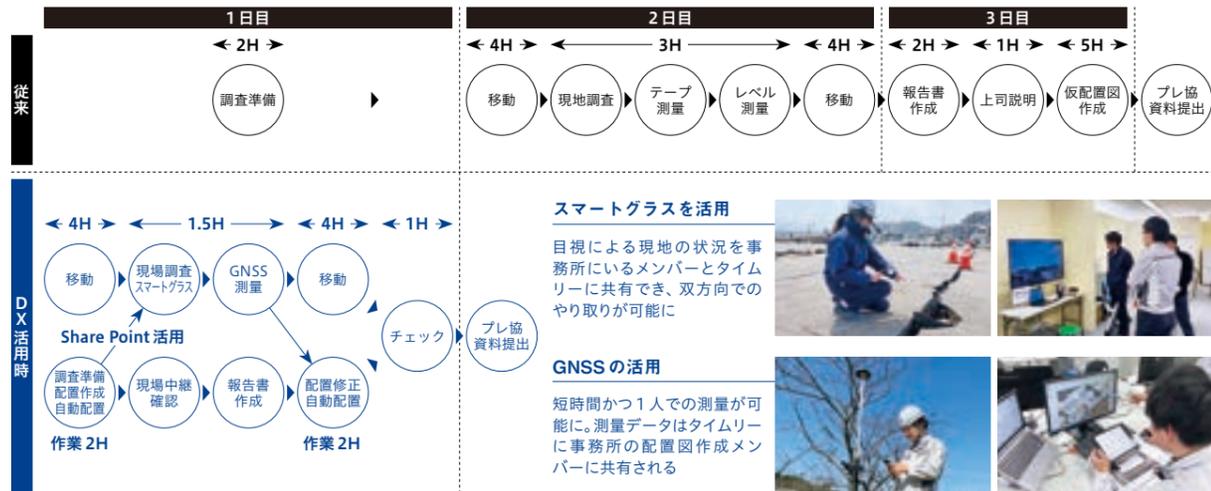
まち全体を元気にするような「未来のプレハブ建築」に期待しています

大和リースとは、2019年からBIMを使った応急仮設住宅の配置案を自動作成するプログラムの共同研究に取り組んできました。ソフト面、ハード面の両方から社会問題にアプローチするためにソリューションを提供していることに、一般的なゼネコンにはない独自性を感じています。特に国内にある未利用地を有効活用し、まち全体を元気にするような取り組みに期待しています。大和リースが被災地で手掛ける、迅速な応急仮設住宅の建設は、今後の建設領域の新しい姿になるはず。また、現在は簡易的で一時的なイメージのあるプレハブ建築を、利用者の快適性の向上という点からも改善し、工法も見直すことで「未来のプレハブ建築」を追求してほしいです。被災地支援にはいくつかのフェーズがあります。一時的に住む場所ではなく、人々があきらめずに地域に残り、復旧、復興していけるよう、住み続けたいと思うような住宅づくりに力を発揮してほしいと願っています。

様

設計：要請前業務プロセスの迅速化

調査に関する業務の効率化と、現地と事務所のタイムリーな業務連携により、要請前業務の日数を大幅に削減



施工：検査業務の迅速化

- LAXSYで複数名による検査と帳票の同時作成を実現。
- スマートグラスの活用により、現場と事務所が状況をタイムリーに共有。
- 経験の浅い職員への指導を実施。



と自分が直接見て経験するのではまったく違い、身が引き締まる思いでした。

Q 今後取り組みたいことは？

●現場で見たBIMの使いづらいつら部分を改善します。現場の熱量を感じ、当社は社会の役に立つ会社なんだと改めて感じました。

●震災前はアプリの性能面を軸に考えてきました。現場に入り、誰もが当たり前に見えることも同じくらい重要だと気付きました。非常時の現場で使えるものは通常でも使えるもの、という観点で使いやすさと浸透性も重視して検討していきます。

●私は小学生の時に神戸で震災を経験し、大和リースが建てた仮設校舎で過ごしたことを今でも鮮明に覚えています。今回のDXの取り組みで改善すべき内容が明確になりました。業務マニュアルを整えるなど、1日でも早く建物を整備することができるよう、次に活かしたいと思っています。



設計フローにかかる日数

Q 能登半島地震でのデジタル技術の活用と成果を教えてください

●プレ協から応急仮設住宅の要請を受ける前にフロントローディングすることで要請後の動きを短期化できました。敷地調査でGNSSとスマートグラスでのチェックをもとに調査報告書を作成し、SharePointで事務所の待機メンバーとタイムリーにデータを共有、BIMの応急仮設住宅自動配置プログラムを用いて仮配置図を作成しました。GNSSの測量結果をもとにした配置図は修正作業が少なく、要請後の配置図作成の時間も短くなりました。

●着工後の応急仮設住宅の検査でLAXSY^{※1}を使ったのも効果がありましたね。以前は指摘事項である傷などを撮影した膨大な枚数の写真を一枚ずつExcelに貼り付ける作業を一人でしていたのが、今回は複数人が同時に検査しながらその場で指摘事項を入力し帳票化できました。大きな団地だと30名ほどが集まって一気に進めるの

で、検査から帳票化までの労力と時間の両面を削減できたことは大きな成果です。

Q 発災後の現地での初動を教えてください

●1月7日の朝5時に金沢から輪島と珠洲の2班に分かれて現地調査に向かいました。渋滞に加え、いたるところに亀裂や段差もあり、周辺の建物は見る影もないほどの状態でした。雪が降る中で自分たちの目だけ頼りに道を探しました。

●ようやく輪島の建設候補地に着くと自衛隊がキャンプを張っていましたね。情報が錯綜していたのと、平地や開けている場所が元々少ない地理的な特徴もあり、その後も候補地が田んぼだった、ということもありました。

●私は珠洲市の三崎中学校、みさき小学校、多目的広場を調査しました。建てられるかどうかよりもまず車が入って行けるの不安でした。海に面したみさき小学校の校庭内に小舟が打ち上げられていた光景は忘れられません。

Q 担当者に任命されたときの気持ちは？

●熊本地震支援の話聞いていたので、自分もプロジェクトに加わりたいたとずっと考えておりました。壮絶な被災地を目の当たりにしたときは、言葉にできない地震のおぞましさを感じました。

●私も被災地に入るのは初めてでした。2年前から参加しているDASHプロジェクト^{※2}で機上訓練や熊本大学との共同研究で流れは頭の中に入っていました。でも、どんなに予想や想像をしていても、現地で起きること、仕事の進め方など身を持って経験しないと分からない、そんな苦労がたくさんありました。

●東日本大震災の支援に携わった人たちから、早朝から打合せが始まったなど施工に関する細かい苦労話を聞いており、事態の大変さは理解していました。現地に入ると「ああ、こういうことか」と実感した反面、聞いた話

※1: LAXSYとは、仕上検査をはじめとする検査業務に特化した建設業向け検査業務支援クラウドサービスのこと
 ※2: DASHプロジェクトとはD = Daiwa House Group (大和ハウスグループ)、A = Action (行動)、S = Speed & Safety (迅速、安全)、H = Heartful (安心)の略称で、大規模災害発生時の応急仮設住宅建設において大和ハウスグループとしての対応(生産・購買・物流体制)が必要なときに始動するプロジェクトのこと



- 1 輪島市農村ふれあい広場横・河原田公民館奥仮設団地の様子
- 2 極寒のなか進められた工事（輪島市農村ふれあい広場）
- 3 広場の小屋を現場事務所として利用（指揮を執る さん、さん）
- 4 雪解け水でぬかるんだ現場（珠洲市みさき小学校）
- 5 完成した農村ふれあい広場仮設団地の全景

工事メンバー



さん

資材調達や在庫管理のほか、現場所長として穴水町の団地を担当。集まる情報に対し「自分ならこの資材が今一番必要だと思う」と自分事として考え業務にあたりましたが、男女の隔てなく戦力として配属いただき、多くの方から支援いただいたことに感謝しています。



さん

輪島市シンザン跡地と能登町松波港町用地の現場管理を担当。鉄骨建方の際に、搬入動線の調整やレッカーの配置場所、一日に10台を超える搬入車両の荷捌きや20の協力会社様の作業動線などの調整に苦労しました。全国の協力会社様に早急に応援に来ていただき、改めて横のつながりの強さを実感しました。



さん

みさき小学校は能登半島の最北部。現場まで片道約6時間かかり体力の限界まで追い込まれました。ジャンボタクシーを手配いただき、通勤時間内に仮眠を取ったものの、過酷な日々が続きました。メンバーで声を掛け合い、ワンチームで明るく楽しい現場環境をつくることで工期内に完成できました。



さん

健康ふれあい広場、松波港町用地、見附ドームの現場を管理。資材手配が少しでも遅れると工程に影響が出るため、搬入計画の見直しを行い進めました。入居予定者さんから「やっと抽選に当たった、建ててくれて本当にありがとう」という言葉をいただき、社会に役立つ仕事だと再認識できました。



さん

職人さんには海外の方も多く、現場のルールがなかなか浸透せず苦労しました。辛抱強く繰り返し働きかけ徐々に意識の変化が見られました。地域も国籍も違う方たちと意識を統一して目標を達成することに意義を感じるとともに、災害復興は多くの協力と一体感がなければ成しえないと強く感じました。

施工中の現場から

ふれあい工房阿岸グラウンドと農村ふれあい広場横・河原田公民館奥の応急仮設住宅を担当。全現場で協力して完成を目指す中で、不足する物品や人手を調整して助けていただきました。改めて組織の大きさや連携の重要性に気付くとともに、今後は提供できる立場になりたいと感じました。



さん

応急仮設住宅の現場管理を担当。資材管理に苦労しましたが、協力会社様の職長さんの意見を聞き、独自の現場ルールを取り入れ乗り越えました。実際の被災地はテレビで見たものとは全然違い、今までの普通がどれだけ幸せかを改めて感じる機会になりました。PJに携われたことを誇りに思います。

さん



作業員延べ人数

※2024年7月10日現在

#39769

工事

全国から作業員を総動員し、13の団地でそれぞれが力を発揮

7月10日現在、当社が担当し完成した13の団地に関わった作業員は延べ39,769名。1団地での1日あたりの最大作業員数は246名、携わった当社従業員は34名です。週末になると全国の事業所の工事責任者の方々がリリーフ※要員として駆けつけてくれました。

急を要する応急仮設住宅であるため、職人さんには1棟ずつではなく複数の棟を同時に並行して対応していただく必要があります。そのため現場件数が最も多かった2月、3月は各地の工事統括部長の協力を得て全国の協力会社様にも駆けつけていただき、取引をしない会社にも声を掛けました。

資材調達では購買部門が大和ハウジンググループと連携。大和物流には富山県内の倉庫の利用、デザインパークには団地の看板のほか、カーテンや手すりの施工協力、大和エネルギーからは照明器具や衛生器具、換気機器を納品していただくなど手を尽くしました。

水が出ない、資材がない、人手が足りないという、音を上げた

くなるような現場でも、多くの被災者の方々が入居を心待ちにされています。協力会社様も当社の若手も、誰もが最大限、自分ができることをやりきるという姿勢で臨み、誰一人としてあきらめるような発言をする人はいませんでした。いくつもの困難な現場を乗り越えてこられたのは「震災支援は、当社の使命」という共通の思いを抱いていたからにほかなりません。



さん



さん

※ リリーフとは、応急仮設住宅建設に携わる現場担当者の休日確保と施工に関する助言を目的に全国の工事責任者が週末に交代で現場のサポートを行う当社独自の仕組みのこと



ピーク時の1日のトラック出荷台数

#23

購買



応急仮設住宅の総面積 (㎡)

#31800

デポ・工場



- 1 珠洲市多目的広場の現場朝礼の様子
- 2 全国の工事責任者が土日にリリーフとして現場を支援
- 3 応急仮設住宅の内装工事の様子
- 4 最初の現場から携わってくださっている甲斐田工業職長の様

グループが連携し 最大効果を発揮

発災直後、まず行ったことは購買先の被害状況と被災地へのアクセスルートの確認です。海上ルートは活用可能な港がなく、陸路に限定されました。そのような状況下で大和物流の協力のもと富山物流センターに資材を集約することで物流面の課題を乗り越えました。平常時の平均トラック出荷台数10台に対し災害支援ピーク時は23台と、物量の多さを実感しました。購買部は昨年度よりグループ協働購買のため大和ハウス工業の一員として業務を開始しています。同じ応急仮設住宅を建設する仲間として、終始一丸となって連携し対応することができました。



さん

資材調達とデリバリー（富山物流センターでの荷受け、在庫管理、配車・出荷）を担当。資材出荷の中間拠点となった富山県高岡市の物流センターでの業務は、通常とは全く異なる業務内容だったため、携わったメンバーがそれぞれの役割を果たし相互にフォローすることで乗り切りました。



さん

多忙な中でも 先を見据える

1月4日には、被害状況から想定した応急仮設住宅400世帯分の必要部材明細を作成し、全国のデポの在庫状況や整備能力から出荷の割振りを決定。新規生産が必要な部材も抽出し、割振りを行いました。サプライヤー様からの供給が滞ったり、停止してしまった部材については、現場との工程調整や、代替品の検討を即時に進め、7月12日までの集計では、18団地1,191世帯、31,800㎡分の部材を出荷しました。備蓄の必要な部材の抽出と量の再考、寒冷地での仕様の検討、適切な輸送の確保と中継拠点の活用方法など改善点が浮き彫りになりました。



さん

栃木二宮デポで門前グラウンドゴルフ場団地用の部材の整備、生産、出荷を担当。279戸の部材を手配する中で初動の大切さを感じました。柱1,500本、梁350本を早急に整備し、集積、出荷するとともに在庫の尽きたH鋼基礎を、どの工場で、どの種類を何本生産するか把握し部材確保に努めました。



さん

工事メンバー



さん

門前グラウンドゴルフ場では、協力会社様の支援が非常に大きかったと感じます。職人さんから「次、何する」「どこを手伝えればいい」と自分たちに関係のないところまで協力や指導をしていただきました。能登の復興はこれからです。小さなことでも支援につながる行動を意識してほしいと思います。



様



プレハブ建方指導、鍛冶工、場内整備などを担当。建方指導では、職種が違う方々に言葉だけでなく実践して伝えました。また工事中は、被災者や近隣の方々へ気配りを大切にしました。建方従事者の減少が危惧される中、部材の種類を減らすなど効率の良い建方への改善が必要だと感じています。



さん



土日の工事責任者
リリーフとして支援

竣工までに、次に何をすべきか、何を調整しておかないと間に合わなくなるか、同行の工事責任者と協議して、可能な限りのアドバイスと場内の整備を行いました。工事担当者の適正な配置が難しく、負荷が大きくなる中での責任者リリーフの採用は、適宜軌道修正につながったと思います。

さん

消耗資材の調達に支障がありましたが、協力会社様に宿泊先宛てに発送していただいたり、運送会社の配送ルートの復旧状況を調べてもらい、復旧の状況に合わせて現地への納入方法を変えるなどの工夫で、無事に資材調達ができました。多くの方の応援が非常に頼もしかったです。

取材ごぼれ話

住んでないけど、住めば都!?

農村ふれあい広場の物置小屋をお借りした現場事務所は、冬はすき間風が吹き込み、6月には虫が大量発生。それでも2団地を建てた最前線基地は工事担当者にとって必要不可欠な拠点でした。



様



基礎工事・土木工事全般を担当。地割れや降雪の中の長時間通勤はとても苦労しましたが、応急仮設住宅の完成を待つ方々のために気合で乗り越えました。各地から応援に来ている協力会社との連携や共同作業を通して、再度ONETeamで取り組む大切さを学びました。



さん

北海道東北地区の
統括部長として支援

田中統括部長を中心に週1回、PJ室と施工推進部、各地区の工事統括部長で会議し、工事担当者の配置と協力会社様の手配を行いました。当社は有事が発生した際に先陣を担う企業です。PJに携わった従業員には、今回の経験と使命感をつないでいってほしいと思います。



- 1 たくさん子どもたちが完成を待ち望む仮設校舎
- 2 輪島市立河井小学校で進む仮設校舎の建設
- 3 震災の爪痕が残る校舎
- 4 子どもたちが安全に生活できるよう教室の床面を丁寧に施工
- 5 さまざまな設備を要する給食調理室は配管や配線が多い
- 6 全国から応援にきている自治体職員用の輪島市仮設庁舎
- 7 仮設校舎や仮設庁舎の周辺エリアの状況 (6月21日撮影)



取材こぼれ話

子どもたちの笑顔のために

河井小学校の仮設校舎では、被害の大きい小学校3校を含む、計6校の小学校を集約し授業を行う予定です。被災後にバラバラになった子どもたちが再会し、笑顔あふれる学校生活が送れるように安心安全な校舎の建設が進んでいます。



金沢支店メンバー



さん

とき第2団地の建設現場を担当。昨年5月の「令和5年能登半島地震」でも応急仮設住宅建設に従事しましたが、震災の怖さや悲惨さには慣れません。今回は役割分担や窓口の明確化が迅速な対応につながることを、協力会社様を含め多くの方のチームワークが大切だということを特に実感しました。



さん

応急仮設住宅（震災PJ）以外の災害対応チームの責任者と自治体営業担当を兼任。分野ごとの各リーダーの指示のもと自由に意見ができる組織づくりを意識しました。日々、連帯感と達成感を感じながらも、たくさん悩みましたが、悩んだだけ前へ進むことを忘れなかったことが成長につながりました。



さん

派遣当初は震災PJ補助として石川県との交渉を担当。想定以上の費用に対し、みんなで議論し、時間と労力をかけ丁寧に根拠を説明した結果、信頼関係を築くことができました。自分都合ではなく、地域の状況や相手の事情を考え動くことは、日々の営業活動においても大切だと改めて感じました。



さん

小学校や体育館、庁舎、職員宿舎といった官公庁の仮設物件の意匠設計を担当。建設地決定から着工まで短期間で進む仮設物件に加え、震災以前の物件にも対応するなどスケジュール調整に苦労しましたが「決められた期日を守ること」を信念の一つひとつの物件に真摯に取り組みました。



仮設建物の延べ床面積合計 (㎡)

※2024年7月1日現在

#13258

金沢支店

学校、商店、宿舍の建設に特化

金沢支店は県内の被災した学校の仮設校舎や仮設店舗、そして全国から応援に駆けつけている自治体の方のための宿舍・庁舎の建設を担当。仮設建物の延べ床面積合計は13,258㎡です。被災者の方々の応急仮設住宅を担当する能登震災プロジェクト室と、そのほかの支援を担当する金沢支店の二つの体制で挑んだのは、大規模な災害では発災から2ヶ月以内の建設依頼や相談が最も多いという過去のデータに基づいた社長の判断です。

発災後、金沢支店は1月5日から営業メンバー全員で被災したすべての自治体を訪問。多くの自治体や商店の困りごと、ご要望を一件ずつ伺い、当社ができることを具体的に提案してきました。当社が広範な支援を充実させられたのは、この二つ



さん

の体制を築いたことによる成果といえます。

産業規模が小さい石川県では今後、震災の影響により通常の案件が発生しにくくなること予想されます。そこで現在は学校や商店の仮設建築工事と並行して、復興支援を見据えた地域との関係性の構築にも重点を置いています。まずは地域の状況や要望の熟知に努め、多くの方々が住み続けたいと思うまちづくりの強力なパートナーとして今後10年、20年と地域を支えることが金沢支店の使命だと考えています。

使命を受け継ぎ、 事業を進化させていく



さん

「高き住居は児孫の和樂
おも 想へ惨禍の大津波

此処より下に家を建てるな
生存僅かに前に二人後に四人のみ」

これは岩手県宮古市姉吉地区にある災害の石碑に刻まれた文字です。こういった「自然災害伝承碑」は地震・津波・洪水・噴火などの大規模な自然災害の教訓を後世に残すためにつくられており、全国に2,100基以上あるといわれています。伝承碑の多くは災害にあった人たちが将来、この地に住むであろう子孫のために、防災意識を高め、教訓を減災に活かすようにとの願いが込められています。

この度の能登半島地震で応急仮設住宅建設に従事していただいた従業員・協力会社の方々、また、留守の事業所で頑張っていた方々に心より感謝します。今回は半島型の災害であり移動手段などこれまでの災害対応と異なることが多くありました。今後予想される災害に向け新たな準備の必要性を痛感しました。

大和リースは災害があった後に応急仮設住宅を建てる会社から、緊急・応急・復旧・復興のそれぞれのステージで社会の役に立つ会社になっていきたいと思っています。事業としての「自然災害伝承碑」です。

災害に遭われた方の一日も早い復興を祈念いたします。

なレパトリーを備えることは、従来の組立型のプレハブをつくるための時間を稼ぐことにつながるんじゃないでしょうか。

●作業員の方々に応急仮設住宅の基礎知識に触れていただく機会を設けるべきだと思います。今回、大和ハウス工業では、普段プレハブの仕事をしていない建方作業員さんが1つ目の現

場で学び、2つ目以降はそのチームで建てられる技術を習得されていました。

●そうですね。プレハブ専門の人を2倍に増やして備えることは現実的ではないので、重量鉄骨を扱っている建方さんに大規模災害時には応援に駆けつけていただけの仕組みも必要ですよ。



さん

Q 半年間を振り返って最も印象に残っていることは何ですか？

●毎日の朝礼後のミーティングが、課題抽出の場となったことです。工事・設計・設備・コスト・管理・営業のリーダーで昨日の出来事や課題を共有し意見を出し合いました。誰かの責任にせず、全員

が同じ方向を向いて問題・課題に取り組んだ日々は、なかなか得られるものではありません。

●一丸となってやり抜く雰囲気とその仕組みが築けたこと、各地から応援に駆けつけてくれた人たちの力を得られたことは本当に大きな経験でした。個人的には一生忘れられない、人生に残る仕事になりました。

初めての災害支援でプロジェクトリーダーを務めた さんと、ノウハウやメンタル面で さんの心強い支えとなった さんに、苦労や学びを語っていただきました。

えば最速で進めなければいけない、作業員のための宿泊施設と現場を行き来するためのレンタルカーの確保は、旅行会社の協力と本社の力添えがあってもまだまだ足りないという状況でした。瞬時に判断して対応すべきことが、後手になってしまいうこともありました。



さん

Q 大規模災害の支援に携わった実感を教えてください。

●スピードが命という言葉があります。想像を遙かに上回るスピードで多方面から押し寄せる問題と課題に対応しました。部門や役割に関係なく皆で一致団結し、県やプレ協に要請されるコストや条件に迅速に対応しながら、起こり得るさまざまな問題を共有し、どうクリアするかを考えて取り組んでいきました。

Q プロジェクトの苦労と得られた学びを教えてください。

●失敗が許されない大きなプロジェクトでした。特に1月、2月は、怒涛の日々が続き、あらゆる方面からさまざまな問題が解決するよりも速いスピードで降り注いでくるので、眠れない日々が続きました。特に最初の値決めは、体力も精神力も削り取られました。

●最初の値決めはその後のすべての基準になるので非常に重要です。いろいろな情報を整理し、私たちが対応する戸数は1,000戸になると予測していました。

対談 金沢支店長 × 能登震災プロジェクト室長

震災プロジェクトで 私たちが経験し、学んだこと

●特に価格に関する要望に応えるのが厳しかったですね。資材の高騰に加え、道路状況が悪く現地に宿泊場所がないことで作業員の労務費も大きくのしかかっていたからです。基準となる最初の30戸を寺田支店長に助けていただいたことが、その後さまざまな現場で生かされました。「俺は絶対に見捨てない。絶対に最後まで一緒にやっていく」と 支店長に何度も言っていたとき本当に心強かったです。

●至長も最も過酷だったところに、意識がもうろうとして何を言っているのかよく分からないときがありましたよ(笑)。も東日本大震災の災害支援で陣頭指揮を取られていた当時は心労で眠れなかったと話されていましたが、窓口を務められた石川県の 様も週に1日はしっかり寝る日を決めておくべきだと感じたそうです。

Q 今回気付いた大規模災害の対応における課題は何ですか？

●プレハブ専門の作業員は年々減少していると伺いました。1,000戸の対応でも厳しい状況だったので、これが東日本大震災のときのような規模になると工事監督や作業員の負担は計り知れません。

●東日本大震災では大和ハウスグループで11,051戸を建設しました。どうやって成し得たのか、今回の経験を踏まえても想像が付きません。会長が言及されていたように、ムービングハウスを持つ